

と西洋医学 趙洪鈞（中国・河北中医学院）

五 朝鮮の東洋医学歴史文献と中国・朝鮮の東洋医学交流 孫

思明（中国・延辺医学院）

○サテライトシンポジウムⅡ「アジア伝統医学の国際交流史」

八月二十一日、午後一時半～四時半、座長・矢数道明・大塚恭

男

主催 日本東洋医学会

共催 日本医史学会・東亜医学協会・北里研究所附属東洋医学

総合研究所

実行委員長 矢数 道明

開会の辞 矢数 道明

一 医学情報交流と文献資料の歴史 王 平（シンガポール中

華医院）

二 中・近世における伝統医学の国際交流 宗田 一（日本医

史学会常任理事）

三 東西医学の窓口としての長崎の役割 酒井 シヅ（順天堂

大学）

四 昭和期における東洋医学の国際交流 津谷 喜一郎（東京

医科歯科大学）

追加発言 矢数 道明

閉会の辞 山田 光胤

（真柳 誠）

「初代曲直瀬道三顕彰碑」建立・除幕式

昭和六十二年九月、矢数道明先生の主唱のもとに、日本東洋医学会、日本医史学会、東亜医学協会は先哲医家追薦委員会を結成し、曲直瀬玄朔以下歴代今大路家の菩提寺である祥雲寺（東京渋谷）において、初代道三生誕四八〇年祭を行い、法要・記念講演・記念展示等を行った。その時以来、道三の墓石のある京都の十念寺（京都市上京区寺町通り今出川上ル、住職君野静賢師・浄土宗西山派）の境内に顕彰碑を建立し、日本医学の中興の祖ともいふべき初代道三の功績を、永遠に称えようという気運が盛り上ってきた。

そこで日本東洋医学会、日本医史学会、東亜医学協会が主催団体となつて、初代曲直瀬道三顕彰碑建立準備委員会を結成して、平成二年十一月初旬を目的に、碑を建立することを議した。

ここで概略の経過を報告する。

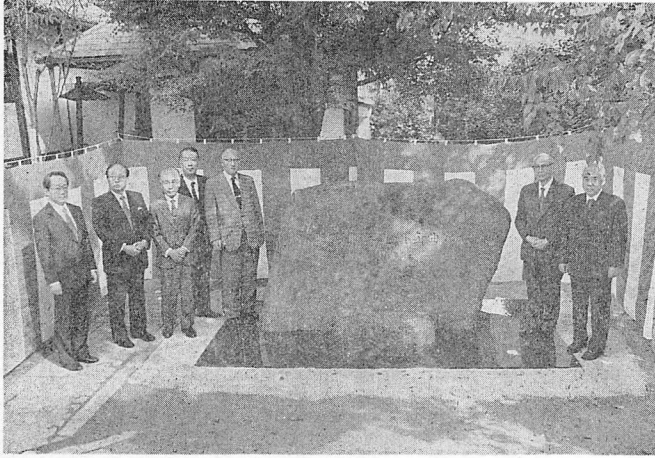
二月十二日、東京より矢数会長の意をうけて、土屋・小曾戸委員入洛、京都より細野・坂上・杉立各委員が十念寺に任職を訪ね、顕彰碑を建立したき旨をのべる。任職は当方の主旨に全面的に賛同し協力する。ただし本堂の新築計画があり、明年二月から一年間をかけて新築する。したがってその工事にかかる前に、碑を建立していただけたら好都合との話を承る。

五月二十日、矢数道明会長の御熱意を承る。

六月、杉立は君野任職をたずね、実行に移らせていただく旨を

申入れる。

七月初め、新築される本堂は八角形のコンクリート造りで、夢殿のような建物になる。そこで建立場所（本堂に向って右手、墓地への通路の傍の一番よく目立つ場所）・石材・形状及び周辺の植栽等は、十念寺の境内（本堂裏の墓地には、道三・亨徳院直瀨家・施薬院直宗とその一統の三雲家の墓があり、他にも公卿の墓が多い）に調和のとれたものとする必要があるから、本堂を設計監督する高口恭行氏（京大建築科出身、大阪市一心寺住職、かつ奈良女子大学教授）に碑の設計、見積等を依頼することとした。



八月末、碑の設計図が出来上

る。石材は鞍馬石の自然石で横長に設置する。題字は右から左へと書き、裏面に四百字程度の解説文を刻むことになる。題字は矢数道明先生が、解説文章は委員で合議して簡明にまとめることとし、早速実行にうつる。

九月二日、東京より小曾戸、真柳委員入洛、京都より宗田、坂上、杉立各委員が十念寺を尋ね、除幕式の日取（十一月三日）次第等の細部を決める。しかし今回は急な事でもあり、関係者のみが参集して除幕を行い、記念式典は後日に行うことに決める。

九月中旬、素材である鞍馬石が決まる。鞍馬石とは洛北鞍馬の山中の砂の中から掘りおこす自然石である。古来庭石としては最高のものとされてきた。花崗岩ではあるが鉄分を多く含有するため、長年月の間には、暗褐色の鉄錆を帯びてきて、その古淡な味わいは庭石の最たるものとされているが、碑石としては適当な大きさ、形ものが少なく、かつ高価なためあまり使われていない。京都市をみまわしても、鞍馬石を使用した記念碑は数少ない。

今回の施工に当る十一屋石材店は宝暦年間から十念寺門前で営業しているが、その尽力で、横二・四米、高さ一・五米、重さ三・五トンの鞍馬石（こぶ石）の自然石を入手することができたのは幸運であった。

題字は矢数道明会長の筆跡、解説文は矢数圭道委員が清書して、石材店に送付した。

十月初めより、これを手掘り作業にて刻字にかかり十月二十日作業終了したので、十月二十三日より設置作業に入り、十月三十日終了した。さらに碑の周辺整備も終えて、寺の門前に「曲直瀨

道三墓所」の石柱も建て、十一月三日の除幕式を迎えた。

十一月三日、快晴の文化の日、矢数道明会長以下約三十名の委員、関係者列席のもと、正午を期して除幕式が行われた。先づ君野導師の読経の後、今大路家、曲直瀬家の末孫らによつて除幕が行われて、鞍馬自然石の堂々たる記念碑が姿をあらわした。参列者は写真撮影の後、墓地を訪れて道三の墓を拝したが、道三の古い墓石と顕彰碑とが、好一對をなしていることを認めた。

ついで本堂において土屋委員の司会の下に道三の記念法要が行われた。読経終了後、矢数会長より顕彰碑建立の趣旨について説明・あいさつがあり、次に杉立が本日までの経過報告を行い、宗田副委員長より解説文内容の説明をうけて、午後一時記念法要を終った。

ついで別室にて懇親会にうつった。東京から参列した今大路家五名の末孫・曲直瀬陽造氏（享徳院家）の紹介及びあいさつがあり、坂口弘委員の閉会の辞をもつて有意義な除幕式関連行事が終った。なお明後年には十念寺本堂が完成の予定であり、道三没後四百年に当るので、記念行事を行うように企画されている。

題字・説明文

初代曲直瀬道三顕彰碑

初代曲直瀬道三ハ日本醫學中興ノ祖ナリ 永正四年京洛柳原ニ生レ名ハ正盛又正慶 字ハ一溪 通稱道三 雖知苦齋又蓋靜翁ト號ス 永正十六年九月相國寺ニ移リ喝食トナリ等暗ト稱ス 年二十二下野足利學校ニ入學 時ニ明ヨリ歸朝セン田代三喜武毛ノ間ニ李朱醫學ヲ唱フ 享祿四年十一月柳津ニ三喜ト再會シ

其ノ門ニ入り講究スルコト十四年ニシテ京ニ歸ル 天文十五年學舎啓迪院ヲ洛下ニ建テ後進ヲ誘掖シ其ノ名天下ニ鳴ル 天正二年啓迪集八卷ヲ撰シ叡覽ニ供ス 正親町天皇大ニ嘉賞シ翠竹院ノ號ヲ賜リ僧策彦ニ勅シテ序ヲ給フ 足利織田豊臣徳川四代ノ信任ヲ得 晩年亨徳院ト改ム 文祿三年一月四日歿ス 享年八十八 京洛十念寺ニ葬ル 後陽成天皇ノ慶長十三年四月正二位法印ノ口宣ヲ賜ル

昭和六十二年九月後學相寄り東京澁谷祥雲寺ニテ生誕四百八十年祭ヲ催ス 今茲ニ後裔關係團體學會ト協リ菩提寺十念寺ニ顯彰碑ヲ建テ功績ヲ永久ニ稱ヘントス

平成二年十一月三日

日本東洋醫學會

日本醫史學會

東亞醫學協會

建之

初代曲直瀬道三顕彰碑建立準備委員會

會長 矢数道明

委員長 大塚恭男

副委員長 宗田 一、杉立義一

委員 坂口 弘、細野八郎、山田光胤、室賀昭三、松田邦夫、矢数圭堂、菊谷豊彦、酒井シヅ、小曾戸洋、真柳誠、土屋伊磁雄

なお、顕彰碑建立に要した一切の経費は、東亜医学協会の寄附金によつた事を附記する。(杉立 義一)